

「家づくりのヒント」



浪瀬朝夫

株式会社 浪瀬建築設計事務所

「家づくりのヒント」

はじめに

昨今、「住宅―住まい」に対する関心は以前にも増して高まっています。家を建てようとする人々が、出来合いの家ではなく、自分らしく住まう家、より快適に暮らせる家とはどのような家かを真剣に考えています。豊かさへの希求は今日、自分の、または家族の日常生活の場へと向かっていくように思えます。

建築の設計を日々行う私達は、クライアントから提示される要望を、構造、コスト、性能、敷地環境といった多面的な問題と組み合わせ一つの解答を引き出しデザインします。クライアントのための世界でたった一つの家は、それぞれの問題がバランスよく解決できた結果であると信じています。

デザインの過程では、もつとも重要で、しかもそれを間違えるとすべてが失敗に終わるといった、最初のアイデアの段階があります。先に述べた様々な条件を確かめながら、一方でそれらを引っぱりそれらを統合していくアイデア、結果として住まいの性格を決定づける意図とでもいえ

るものが、実は設計の始まりなのです。

家に関する資料や書籍は専門家向けのものが多く、又一般向けのものも、実際に家を建てた体験談や住宅の構造、性能（機械的な性能）に関するものが大半を占めています。ここではいくつかの住宅を实践するなかで、私たちの事務所が考えてきたこと（一般的で場合によっては普遍的と思えることも含まれているかと考えます）が述べてあります。住宅をつくる前に考えておきたいこと、知っているのと家の最初のアイデアに効果をもたらすこと、機械的な性能以上の、家族にとっての「住まいの性能」に役立つこと……。これから住宅をつくろうとされている方々にとっての、「家づくりのヒント」となれば幸いです。

第一章 空間・領域・場所

人を取り巻く環境（空間）は、自然や建物、交通などの物理的な要素に、その時々気分や置かれていた立場、あるいはその人の体験といった個人的な要素が付け加えられ全体を形成していると考えられます。それは、人それぞれがどこにあっても日々考え感じながら生活している生身の人間だからです。従って、ここでは物理的な環境としての「家」について具体的にアプローチする前に、人間の「空間」にはどのような特徴があるかを考察し、後の「家」への理解に役立てることにします。

1. 「空間」という言葉

○「空間」の意味

日常生活で、空間という言葉を使うことはめったにありませんが、建築と空間は切っても切れ

ない関係にあります。建築空間というのと同様、空間という言葉は都市空間とか、宇宙空間というように熟語としては多く使われています。最近では文学の中の空間とか、政治空間、パソコン内のバーチャル空間（仮想空間）などよく耳にします。私たちも、スケッチを前にクライアントにデザインを説明する場合、この「空間」という言葉を使ったりします。この「空間」という言葉は、よく使われるなどの熟語にも共通する言葉でありながら、実はクライアントにとって最初に遭遇する、専門用語にも聞こえる慣れない言葉、しかもっとも重要な概念のひとつなのです。

「空間」をもっとも端的に説明したのは、古代の学者アリストテレスです。彼は空間を次のように定義しています。「空間：あるものによって占められている容積のまわりを、外部から境界づけられている、その内側を示す。」と。この定義が非常に分かりやすいのは、空間には事物が必要で、空っぽの空間はありえないということです。文学の中には登場人物がいて背景があり、一冊の本の中にはそれ独特の空間が広がっています。又、政治の世界では議論の対象があり、その対象を取り囲む空間の中に政治家達や当事者がいて政治空間があるといえます。インターネットの中には情報を取り囲む空間が存在します。都市空間は都市の施設を中心とした空間を意味します。そして「住空間」という場合、住まいの中心となる個人や家族そのものを取り囲む空間があるわけです。

このようにして「空間」を理解するなら、そここで使われ、今まで何やら不可解なままうなずいていた「空間」という言葉が、明瞭になってくるのがお分かりいただけると思います。

事物があるところに空間は発生する、逆に言えば「空間」を感じるところには何らかの事物が存在する。目に見えるもの、見えないが感じるものなど、私たちの周囲にはたくさん空間が存在するといえます。

○ 個人の空間

社会やそれぞれの地域あるいは組織、そして家族の基本単位は個人になるのですが、では個人の空間とはどのような性格のものなのでしょうか。先の「空間」の意味から言えば、個人の空間は、個人の身体のまわりに形作られていると言うことが出来ます。

たとえば、自分のデスクに座った時、手の届く範囲に入っている本やペン、スタンドを置き、仕事や趣味を楽しんだりする環境を作ります。様々な出来事を振り返ったり、思索を巡らして新しいアイデアを思いついたり、これからの未来を想像し、仕事の手順を考えたりと自分と向き合って自分自身と話す空間をつくります。明らかにそこは、自分の空間と考えることができるでしょう。そうした自分の為に整えられた空間でなくても、自分の空間を認識する場合があります。街角のオープンカフェ、テーブルについてお茶を楽しむ時、気に入ったカフェであればなおさらのこと、落ち着きと休息を得て、ちょっとしたひとときでも充実した時間を持つたりします。テーブルの周縁にはやはり自分の空間があると感じるでしょう。通勤を混雑した列車で過ごす時、

又騒がしい街頭を歩いている時、見ず知らずの人の極端な接近に出会うと身をかわしたりします。何らかの方法で自分を守ろう、自分の居場所を確保しようという本能が働きます。広がりがない、狭められたと感じるような空間でさえ、そこに自分の空間があるのです。このように人は、自分の身体のまわりに空間をめぐらせ、しかもどこへ移動する場合もその空間をある意味たずさえて移動しているといえます。事物の専有によってその周辺に空間が発生するのと同じく、個人の空間は自分の身体を中心として存在し、常にその人と共にあって分けることが出来ないものなのです。

(余談)

街に人だけがあつて、不思議に思い近づいてよく見ると、有名人が大勢の人に取り囲まれています。彼のそばには関係者が居ますが、その人だけは彼を中心に大きな同心円を描いてぼつかり空いています。彼が発するオーラとでも言うべき独特の空気が、一般の人たちをそれ以上近づけさせないのでしょう。その同心円状の空間は、彼個人の空間であることが分かります。そして一方大勢の人たちが、「彼の空間」を無意識に認識している場面でもあるのです。

2. 「領域」

○ 個人の領域

例えば小さな書斎、机の前で作業を行う場合、わたしたちは日頃使っているペンやノート、書類やダイレクトメール、パソコン、新聞など、手の届く範囲に置き作業に利用します。もし効率が悪ければ、自分が使いやすい様に少し整理をしたりもするでしょう。自分の書斎であれば見た目に悪くても、そのような環境を作ることが出来ます。こうした環境は、そのうちにでも心地よいものとなります。どこに何があるのかわかっていて考え事や作業に集中でき、次第に「自分の」部屋という認識が深まっていくのです。小さな書斎に人気があるのは、すぐに納得がいきます。見慣れ、使い慣れることによって親しみを覚え、何よりも自分の手で整えたのですから、その為の満足もあります。少しずつ心地よさを得ていくと同時に、自分自身がその空間であるような感覚さえ持ちます。空間が自身に同化されたと言ってもよいでしょう。身体を中心にした自分の空間に、身近な環境を取り込んだとも言えます。こうした自分の空間は個人の書斎に限ったことではなく、職場の自分のデスクでも同じことが言えます。他人のデスクにあれこれ触れることはありません。

家屋の中でも、また勤め先でもそうした小さな空間に留まっていることはありません。

家族や友人との食事に、又商談のため新しい人と会うなど、何らかの意図によってその場から移動します。個人の空間を引き連れて様々な場所へ移動します。食堂に行つて家族と共に食事のひとときを過ごす、友人となじみの店に行く。そして警戒心など持つことなく過ごすことの出来る空間とは、自分の書齋のように居心地のよい空間、いわば自分に同化された空間、自身が許容している空間ということが言えます。一方、居心地の悪い気のおけない場所もあります。そこに居ることさえ不愉快でさっさと引き上げ立ち去ってしまいたい場所、危険と感ずる場所、ラッシュ時の足の踏み場さえない車内、又ある場合には自分の苦手な人が居る場所など、そうした所ではくつろぐことなどないのです。

このように個人にとつて、自然に同化した空間とそうではなく、逆に遠ざけてしまいたい、近づきたくない空間があります。また、そのどちらでもない空間もあるでしょう。関心の薄い場所や、見知らぬ土地などがそれに当たります。個人の空間の周りには、その人固有の様々な空間が広がっているのがわかります。親密に感じる空間、気を許せる空間と、親密になれない空間、疎外（疎遠）を感じる空間、そして無関心な空間などです。空間という言葉をも、個人と人、個人と組織、個人と社会との関係にまで意味を拡張してもよいでしょう。家族と隣人、見知らぬ人々、個人が属する社会とさらにそれを取り巻く社会、よく知っている土地と知らない土地と言えればよりわかりやすいでしょう。「領域」という言葉をそれぞれの空間の集合とみた場合、個人を取り巻く環境は、親密な領域と疎外（疎遠）された領域、そして無関心なあるいは未体験の空間領域

とに分けられ、性格の異なる領域が明確な境界を持たないで横たわっているものといえます。

個人の空間の中心に身体があることは先に述べましたが、同時に空間領域の中心にも個人の身体があります。自分の体の周囲にもっとも親密な空間が存在することに誰も違和感をもつ人はいないでしょう。先にお話した領域は、この身体周辺のもっとも親密な空間領域から徐々に親密さを欠いていくように見えます。イメージの中で私たちは、親密な許容してもよい空間の広がりの外に許容できない空間領域があり、無関心な空間領域、さらに未知の領域がその間や周縁にあることを感じます。

街を歩いていてふと目にとまるもの、目に入らないで通り過ぎてしまうもの、関心の対象やその度合いによって、人それぞれ街の風景や印象は異なります。家族の、あるいは親しい人たちのいる場所から見知らぬ土地まで物理的な空間は連続していますが、個人の中ではそこに微妙なずれや違いがあります。

個人にとっての空間領域は、親密感の高いより重要と思える領域から、余り重要ではない、いわば無関心な領域へとなだらかな階層（ヒエラルキー）をもつと考えられます。空間のヒエラルキーは誰一人として同じではなく、そのひと固有の、その人だけが持ちうる空間認識のありようであることがわかります。

○ 広がる領域

生まれて間もない乳児は円形の図に、より反応を示します。母親の乳房、顔それらを単純な図形、円として最初に認識するからだと言われています。ベッドに横たわった乳児は、視覚による限定的な反応から次第に触れる動作をし、物を握り捕まえるしぐさを覚え、自分の体と周りにあるものとの位置関係を学びます。そしていよいよ立ち上がる時、それまで身体の周辺で終わっていた空間は、一挙に広がり行動範囲は広がります。幼児期のこのたった数ヶ月の劇的な世界の広がりは、人間の本能というものの、彼が言葉で説明することが出来たなら、それは素晴らしい経験あることを私たちは再確認することができるでしょう。

このような幼児期の行動範囲の広がりと同様、私たちは日常生活において、実は同じような体験をしています。新しい出会い、新しい仕事、訪れたことのない場所への旅行、最近買った本や音楽CD、映画、毎日のニュース……。好奇心を満たし、親しみを覚える数々の出来事が、自分の空間領域を拡張していくのです。六十年代、情報媒体の急激な進歩を「人間の拡張」と言ったのはマクルーハンでした。新しい仕事はまた、新しい人との出会いを生むでしょうし、自分にとって新しい知識はまた新しい知識を求めます。このようにして親しみと信頼を覚える領域の自身への取り込みによって、結果として自分の空間領域が拡張していくのです。一方、期待通りではなかった出来事は、無意識のうちに関心の薄い領域へと押しやられてしまいます。これらもまた、何かの不意の出来事が引き金になって、自身の空間のより近い部分へと近づく場合もあります。

個人の気分や、住む場所、組織などでの立場や環境が変化して、その時無関心であったものが、後日とても大切なものになる場合もあります。親しみを覚えるもの、疎外感を感じるものも状況によって同時に変化します。変化の要因は人それぞれ異なります。

このように空間のヒエラルキーは、個人の内側の変化によって、その範囲を拡張したり狭めたり、あるいはあいまいにしたりするのです。しかしながら、どのような性格の領域に取り込まれたにせよ、はっきり言えることは、領域の拡張はその人自身の拡張であると言えます。自身の拡張は個人の成長といってもよいでしょう。不可能と思われる分野に挑戦する科学者、自分の記録を超えるために努力するアスリート、彼らがいつの時代でも話題になるのは、自身の拡張に勇氣を持って挑む人に、誰もが希望を見出しているからに他なりません。

さて、ここまで現実にある私たちの身体と、一方で抽象化されたイメージを必要とする「空間・領域」について考えてきました。これらを次章では、具体的な「場所」との関係で見えていくことにします。

3. 「場所」について

○ 経験と場所

私たちは仕事で移動したり旅行をする場合、目的地を確認する為に地図を広げます。地図に示された目的地が見知らぬ訪れたことのない街である場合は、早速インターネットで目的地を検索することもあります。現在ではネット上の写真や地図で街の風景や自然、山間なのか、海辺なのか瞬時に確認することができます。しかしながら、おおよその情報を得て漠然としたイメージを頼りに出発するのですから、目的地は、相変わらず単なる地図上の位置(ポイント)に過ぎません。

しかし、過去にそこを訪れたことがあれば、ネットで調べるまでもなく風景が瞬時に目に浮かびます。そしてそこで誰かに出会い、何か心に残る出来事でもあったなら、その地図上の位置は私たちの脳裏でさらに明確になり、見知らぬ地図上の位置よりも身近に感じられるはずです。

人文地理学者のエドワード・レルフは「場所」と「位置」を区別して、個人の経験が単なる地図上の位置を「場所」に変える働きがあると述べています。地図上に広がる様々な地点、いわば無数の位置(北緯○○、経度○○として表記される)の一つに自分の身体があり、自身の経験を

伴った「位置」は他の「見知らぬ位置」とイメージの中で区別され、まさに「経験」によって得られたその位置が自分にとっての「場所」に変化するというものです。

例えば、そこで生活した経験があれば、又それが長ければ長いほど、その場所はその人にとって思い出深い特別な「場所」となります。少年時代を過ごした場所、学生生活を送った場所、そして仕事で訪れ様々な出来事を経験した場所、それらは個人にとって人生の貴重な一部分であり、一つ一つの「場所」がその人にとって大切なものとなります。それらは明らかに地図上の単なる位置とは異なるのです。

人は人生のどの時点でもどこかに居場所があり、何らかの目的の為に移動し、別のポイントで新たな経験を得、そのポイントを「場所」に変化させていると言ってもよいでしょう。私たちはそれぞれが、場所（経験）を得ながら日々過ごしているのです。

○ 領域と場所

地図上の単なる位置が、そこでの経験によって「場所」に変化することは述べました。この場所のイメージは当然人によって異なります。同じ街を訪れた人の間にも、その街の印象は古臭い街だとか、懐かしい感じのする街だとか様々です。何かの出来事で親切にされた経験を持つ人と、事故にでも遭った人とはその街の印象はまったく異なるでしょう。その場所のイメージは、その人固有のものである場合がほとんどです。しかしながら一方で「ふるさと」には多くの場合、懐かしい近いイメージを持ちます。それぞれに異なる場所イメージを「ふるさと」という美しい言葉で普遍化しているのです。

さて、身体を中心とした空間がその性格によってひとまとまりとなった「領域」という概念と、この個人にとっての具体的な「場所」を重ねてみましょう。その人の経験によって得られた「場所」は、その人を中心とした領域に溶け込んでいきます。遠くにあっても、自分の故郷がどの場所より一番近く感じられます。また逆に思い出したいくない経験を持つ場所は、自然と遠ざけている場合があります。自分が不快だと感じる居心地の悪いバーが近所にあっても、親しい友人と語り合った居心地のよい遠方の店の方が、その人にとってはより近くに感じられます。

その個人にとって親密でうちとけた場所イメージは、その場所をより近いものにしますが、疎外感のある場所イメージは、その個人からその場所を遠ざけてしまうのです。すなわち、この

広い地平線上にちりばめられたその人にとっての「場所」が、実際の距離とは無関係に、さらには過去と現在とといった時間をも越えて、その人を中心として広がっているのです。領域がその個人を中心境界を曖昧にしながら広がるのと同じく、個人にとっての「場所」は、親しみのある場所から疎外されたあるいは無関心な場所へ広がり、領域と同様に緩やかな階層（ヒエラルキー）を持つと考えられます。

「空間」という言葉の意味から始まり、身体を中心とした空間の特徴を知り、それらの集合（領域）が個人の無意識な性格付けにより、身体を中心にして広がっていることを述べました。そして、個人の空間は前節の「領域」から、ある地点での経験を通して獲得されるより具体的な「場所」によって構成されており、それらは身体を中心としたヒエラルキーを持つことが分りました。

人は人生のどの時点でも、貸し家であれ、所有であれ日々の生活の起点をもっています。朝起きて出発し、再び帰って来る…、個人を取り巻く空間の、「住居」は拠点であり中心です。すなわち「家」は、個人にとっての場所・領域の中心に位置していると言えます。この中心となる「場

所「家」をより豊かに構成しデザインすることによって、住み手にとっての親密な空間経験が積み重ねられ、個人にとって「家」はかけがえのない「場所」へと成長していきます。したがって、目の前に広がる広大な土地のうちからひと切れの土地を選択し、そこに自分の、または家族の「家」を建てるという行為は、「人生の大事業」といった一般的な話以上に、より大切な行為であると言えるのです。一人の人間を取り巻く空間の諸性格から、敷地を含めた家の空間構造―構成が家の性格を決定づけ、それ以降の長い生活に影響を及ぼすのです。個人の空間のもっとも親密な場所、それが家であり、時間の経過（そこでの経験の積み重ね）によって、家はそこで暮らすひとにとって「ふるさと」になっていきます。新しい生活を始めるカップルは、親密な心許せる場所として「新しいふるさと」の創造に努めるべきだといわれます。

次章からは、これまでの話をベースに、空間の拠点となるそのような家づくりの為の、アイデアや工夫の一端を具体的に述べていくことにします。

第二章「家」

ここから家について具体的にアプローチします。敷地からはじめ、家を決定づける各構成要素に着目して、それらにどのような性格があるかを考察します。

1. 土地・敷地

家を建てる場合、建替えと新たな土地を手当てし新築する場合があります。新たな土地を手当てする場合は、通勤の利便性、子供の通学や将来の生活スタイルの変化、そして都心なのか郊外なのか、土地の価格といった諸々が条件となるでしょう。そうした条件のうちいくつかの重要な条件が優先されて、土地は決まっているようです。建替えの場合の土地であれ、新しい土地であれ、敷地は私たち建築家にとって最初に提示される家作りの条件となります。敷地にはそれぞれに固有の特徴があつて、その読み取りが最初の仕事となります。

敷地周辺の環境、とりわけ敷地を中心とした周辺状況にまず注目します。建替えの場合は、既存家屋の調査から入ります。各室の窓からどんな風景が見えるのか、どのような光が差し込んでくるのか、庭の利用状況や隣地との関係や土地の現況など調査します。当然既存家屋での生活の

利便性や特徴などもヒヤリングし、後の設計に役立てます。更地になった時には再度調査に訪れますが、例えば二階からの風景などは、既存家屋がある時にしか出来ない調査のポイントになります。

更地の場合は敷地の真ん中に立ち、三百六十度見渡した時何が目に入るかをチェックします。道路の反対側の景色、隣地の景色、道路の交通量（人、車）、それぞれの方位、隣接する家屋の形状、階数、窓の位置、広範囲な土地の起伏等を観察します。その後、敷地に関する技術的な調査を行うのです。

こうした調査事項をベースに、家の内部についての様々な要望を取り入れた計画を作っていきます。敷地の中央にまず立つてみるのが重要なのは、そこで観察した状況が、後日形作られていく家のそれぞれの内部空間に非常に影響してくるからです。敷地のどの部分にはどのような光が差し込んでくるのか、どのような風景が広がるのか、道を行き交う人の視線は、騒音は…、そうしたことをすべてが空間を計画する上での条件になります。そしてそれらの条件が、内部空間の構成とうまく合理的に融合した時、家はその全体像を現わします。

家が完成した後、敷地は家と同様、先にお話した広い空間の中の、住む人の為に切り取られた空間として成長していきます。家に行きつくまでの道のり、街や自然の風景、そして家屋の中から見える外部の風景、光や風、家を取り巻く環境が「経験」となって、その場所を家族の又は自

分の「場所」にしていきます。敷地の固有性と新たに建つ家が上手に結びつき、一体感を得ることの必然性はそこから生じるとも言えるのです。

2. 「窓、開口部」

○ 窓と風景

展覧会で風景画を鑑賞する際、どのような視点で鑑賞されるでしょうか。私の場合、十八世紀のヨーロッパの風景画であれ、近代の日本の風景画であれ、頭の中で額縁をいったん外し自分がその画家になって、その風景の前に実際に立っているといった感じで鑑賞します。すると過去の風景にも関わらず、自分がその時代に存在してその風景を目の当たりにし、よい感じを持った場合には、画家のその時の気分などあれこれ想像したりするのです。目の前の風景画はその時、一瞬生き生きとして私の中に入ってくるような気がします。

住宅の窓は、換気や採光といった生活するのに必要な物理的なものを提供してくれるとともに、外部の風景を見せてくれます。窓は室内においては外部の風景を切り取って、まるで額縁の絵の

様に室内に豊かさを与えてくれます。部屋の大きさや家具の配置に合わせて効果的に窓を設置すれば、見る位置によって青空が見えたり、遠くの風景を獲得することができます。「ピクチャーウィンドー」とはこのような効果的な窓・開口部を指して言います。開口部がそれぞれの部屋にデザインされたなら、それぞれの部屋が異なった風景を得、ひとつの家の内部に、様々な風景が展開することになるのです。又、窓は外部の光を室内に導きます。南に設置すれば一日の光を、朝のさわやかな光から、夕暮れの穏やかな光までを楽しむことができます。西日を嫌う人もその開口部の大きさや形状、位置に配慮すれば、美しい光の演技を見ることができるようです。このようにして、外部の風景や光を自然のオブジェとして室内に取り入れることは、家具を効果的に選択し、配置することと同じくらい重要であるとも言えるのです。敷地の環境にもよりますが、その場所の風景やそこからしか得られない自然光を積極的に取り入れることは又、その敷地の固有性を積極的に吸収していることと同じ意味になるのです。

○ 広がる空間

開口部のもう一つの効果は、その周辺にある空間に広がりを生み出すことでしょう。開口部を効果的に配置することによって外部空間を室内に取り込みますが、同時に室内の空間に広がり

与えられることは誰もが経験していることです。ここでは、窓のある部屋が広く感じるという以上の効果についてお話しします。

家につけられた開口部は当然敷地の内側にあるのですが、敷地の内側の領域は自己の占有部分であるとの認識から、人はそこに警戒感を持つことはありません。家の開口部周辺では、その外側の空間を人が拡張できる領域と認識されるため開放感が得られるのです。例えば中庭が計画され、隣接敷地側に視線を遮る塀など設置されていれば、そこにできた外部空間は自己の安全が確保されているという自然な感覚から、開口部によってさらに室内の空間領域が拡張されるのです。このような外部空間の利用は、密集地や都心部での計画、コストの面から家の面積を限定する場合など効果的です。小さな家でも大きな広がりを実現することができます。開口部の外部への広がりには他にも様々な工夫によって利用可能です。例えば、狭い玄関でも換気をかねた窓を足元に設置すると、床に広がりを与えることができます。ここでは足元に光が入り込み、外部の地面を垣間見ることによって足元の空間が拡張されるのです。又、人の通過空間の先端に開口部を設けると、より一層の奥行きを空間に与えることができます。廊下の先にある窓の向こうに風景が広がっていけば歩行すら軽やかになるでしょう。効果的な開口部の配置には内部空間を拡張する働きがあるのです。

家族が成長するに従って子供たちもそれぞれ個性を獲得していきます。家族が共有している生活観に加え、それぞれの世代の時代精神によって個性もまた異なっています。最近では「家族」についての議論にいとまがありません。敷地内部に開放された開口部は、個人の領域を拡張する働きがありますが、それは又家族にとって共通の領域でもあります。そしてこの共通の領域には思わぬ働きがあります。例えば、食卓で思わぬ議論の果て重い空気が漂ってしまったとしましう。二人あるいは四人、その間に垣間見る外の風景があれば、雲が抜けて日差しが入って街の風景が少し動いただけでも、心が穏やかになるかもしれません。テラスへ通じているなら、外に出て気分を変えることも可能でしょう。和やかさのきっかけになるかも知れません。世代の違いや考え方の違いによって、個人はそれぞれに微妙に異なる空間・領域を持っているのですが、家族の共通領域は、これらの相互領域の中間にあつて緩衝地帯として働く場合があります。見慣れたなじみある風景や敷地内に計画された外部空間は、共通の領域として個人の異なる領域相互の間に入ってその境界をあいまいにし、時によっては融和させる働きがあるのです。開口部には空間を拡張させる働きとともに、個人の空間を相互に結びつける働きがあるのです。

3. 「部屋」

○ 閉じた部屋

部屋には、小さな換気用窓とドアが一ヶ所しかない。自然光は限られているため、日中でも照明が必要な暗い部屋…。

この部屋では、外部の空間、光さえ入り込む余地のないため、「閉ざされている」という感覚に支配されています。しかし一方、人工の明かりに頼ったこの閉じた部屋が、外部世界を寄せ付けない別な世界を生み出しているとも考えられます。情報過多の今日にあっては、入ってくる情報をすべて吟味することは至難の業と言えます。個人の拡張は、そこにしっかりとした個人の意志がなくては拡散し自己を見失ってしまう危険性すらはらんでいると言えるでしょう。人は時折、人里はなれた田舎に赴き心を休め、再び自分を取り戻すために旅に出たりします。家の内部に自分の掩蔽郷（えんぺいごう）とでも言える場所があれば、外出することなく普段の生活の中で、時折こもって自分を取り戻すこともできるでしょう。自分自身の空間として認識できる領域、それにふさわしい適度な広さ、そうした小部屋には上述のような効用が期待できるのです。屋根裏部屋や小さな書齋に人気があるのは、複雑化し多様化する社会構造の中、それゆえ自分の自分だけの隠れ家的な空間を欲しているからに他なりません。

○ 開いた部屋

それとは逆に開いた部屋とは、家族それぞれの共通の空間に対して開口部が備えられ、場合によつては部屋とは言えないような簡易な間仕切りで仕切られた空間がそれに当たるでしょう。個人の空間はその周縁に生じるのですから、自分の領域に余地を与えるという意味では別な快適性を獲得できます。日本家屋はその昔、障子や襖で仕切られた部屋の連続空間でした。「風土」の著者、和辻哲郎の言う「へだてなきへだて」とは、こうした間仕切りを指し示して、そこに日本人独特の個のあり方を説明しています。隣の部屋で子供がすすり泣く声がさだかに聞こえる…、どうしたのかと心配するが襖を開けずに翌日やさしく振る舞う。子は子で開けてはならない部屋には鍵がなくても言い付けを守った。家族の中にあつて思いやりと配慮、そして規律が備わっていたというものです。それに加えて私は、日本家屋の開放性のゆえんは、当時の家長制のもと、家人に役割や上下関係があつたためではないかと考えています。人の周りに占有空間が生じるために、そこに身分の違いがあれば、家長の場所、家人の場所は決定されていて了解済みであり、あえて部屋を強固に仕切る必要がなかったと思うのです。開放的な古来の家屋の造りを、日本人の自然観に起因する見方だけではなく、和辻氏がいうおおらかさと思ひやりの気持ち、信頼、

それに過去の家長制の慣習が、へだてなきへだての開放的な空間構成を可能にしたのではないかと考えます。

しかしながら、今日のように個が主体の社会であっても、上記のようなむつまじい信頼関係がベースになっている家族（本来そうあるべき家族の形ですが）にとって、開放的な部屋の構成がふさわしい場合もあります。廊下空間を廃して、居間を中心に簡易な間仕切りの個室がレイアウトされた計画なども、そうした空間構成の復活であるように見えるのです。そこには、家族それぞれが主人公でありながらも「家族」の理想の姿を実現したいという意図が感じられるのです。

4. 奥行き

○ 「奥行き」

「奥」という言葉そのものを、私たちは日常語としてよく使っています。「奥様」「奥ゆかしい人」「奥深い考え」等…、「奥」という言葉には、深みがあり熟慮されていて、それ自体魅力を備えているように思えます。そして「奥行き」を形容詞として使った場合、例えば「奥行きのある人」「奥行きのある考え」という場合には、そのことがより鮮明になります。人物やその人の考えをひとつの空間になぞらえてその深さを表現します。

奥行きのある空間といえ、たとえば京都などで現在も数多く残っている数寄屋づくりの家屋があります。数寄屋とはその字の通り、好きに平面を構成した家のこと（狭義には茶室を意味します）です。玄関を入り、取り次ぎの間を経て廊下を直進したり曲がったり、時折中庭の光に出会ったり、薄暗い場所を通過したかと思うと明るく広い広間に到達するや、目の前に美しい庭園が広がって、そのうち奥の間へと進んでゆく。ゆつくりと足を運んでいくうちに様々な室内の風景が心和ませ、その内部空間の豊かさにほっとしたりすることがあります。家屋の内部空間にあって、このような「家の奥行き」は、複雑なプランによって特徴づけるだけでなく、そこに住む人を豊

かにし、家の内部空間をしっかりとした「場所」に変換してゆくのです。

○ 奥行きのある家

奥行きのある家は、前述のように平面的な空間だけでなく、垂直方向にも適用できます。階段を上がって上階へと歩行を進める時に、室内の風景は人の視線の上方への移動、下方への注意よって様々に展開します。狭小敷地の三階建ての住宅などでは、ほとんど垂直方向への空間の展開と言ってもいいかもしれません。このことは、上階に展開する室内の構成を工夫すると、階段を通じて二層分、三層分の垂直方向の奥行きが得られることを示しています。従って奥行きのある家は平面的な広い敷地を必要とするのではなく、垂直方向を考慮する事によって小さな家でも可能なのです。

一般的に人は、水平面での位置を認識するより、垂直方向の位置認識の方がはるかに劣っています。一階の部屋の位置は自然と理解済みなのですが、一階の部屋の上にとどの部屋があるかを想像するのは難しいのです。同様に二階に居てその部屋の真下に一階のどの部屋や場所があるかをすぐには答えられません。上階をも含めた垂直方向の奥行きを手に入れるためには、上下階をつなぐ道線（人の行動ルート）に工夫が必要です。すなわち階段を含めた通過空間のデザインによって、上下階を有機的に結ぶ事が重要となってきます。階段室の吹き抜け空間をよりよく演出す

るのも一つの方法でしょう。又、そこでしか垣間見る事のできない室内や屋外の風景を取り入れるのも一案でしょう。ビルの中のエレベーターに隠れた階段室のようでは、自分がどの階にいるのか、どの当りにいるのかわからないばかりか、当然上下階のつながりを身体で認識する事などできないのです。上階にあがっていく感覚を身体（視覚や筋肉の動き）で感じる事が出来、しかも上の階の雰囲気を感じられたなら、下階とのつながりが意識され、二つの階が垂直方向に連続した空間となります。階段を取り巻く空間を工夫する事によって、垂直方向の奥行きが獲得できたなら、一階床面積の倍以上の、平面的な奥行きを確保できるのと同様以上の効果を手に入れることができるのです。

「奥行きのある家」で人は、水平面を、そして垂直方向を「巡る」ことができます。巡るという行為によって家族の一人一人が家を経験します。そしてこの空間の経験が、家をかけがえの無い場所にしていくのです。水平面に垂直面に広がり奥行きを見せてくれる住宅は、その大きさに関わりなく、住む人に豊かな空間を与えてくれるのです。

5. 外部空間について

○ 延長された空間

外部空間とは、ここでは家から敷地境界線までに広がる空間を指しています。外部空間については「窓、開口部」の節でも少し触れたように、開口部を通して私たちに様々な効果をもたらしてくれます。その一つが内部空間を拡張させる働きでした。テラスに面した大きな開口部は居間や食事の部屋を広がりのある空間にします。又、足元の小窓も日中足元を照らすだけでなく、家の外、地面の一部を見せてくれるので、その部分の空間が延長しているかのような感覚を持つことができます。開口部を効果的に配置し外部の景色に合わせたり、その部屋の用途に沿うよう大きさを決定していくと、その空間は外部へと自然に延長され、壁の存在さえ消し去ってしまいます。開口部はガラスの透明感を利用して内部と外部の空間相互を融和させるのです。このことは、限りのある家の大きさに対して、さらに限りのある敷地をすべて利用してひとつの家をつくることを意味しています。敷地は建物の「残り」ではなくなるのです。土地選定の際の様々な決心は、敷地をすべて住まいとして活用することによって、「納得」と「満足」を後日与えてく

れるものとなります。住まいとして敷地を上手に活用し、しかも敷地全体が家の内部空間と常に関係を保つような家は、先に延べた「場所」の感覚を住む人に印象づけて、敷地すべてを生活の場として生き生きと機能させるのです。

○ 外部空間の活用

外部空間は開口部と室内の関係で成立しますが、外部空間に工夫を与えると先に述べた効果を更に増大させることができます。

「空間」の節でお話したように、空間には事物が必要でした。逆に言えば事物には空間が常に存在しています。古い寺社を訪れると、広い境内の中にぼつんと本堂があつたりします。本堂の大きさに対して境内が広すぎると感じることはあまりありません。本堂には神や仏が祭られていて、ことをはじめから承知しているために、そんなことは考えないのです。お堂の占める空間が神聖さを保っていることも手伝ってはいませんが、その建物そのものが占有している空間を私たちは知らず知らずのうちに了解していると言つていいでしょう。そこにあるものを理解すると、そのもの（事物は）は占有空間をその瞬間獲得するのです。こうしたことから、外部空間に物が置かれた場合、それが住む人に親しみのあるものであればあるほど、強い占有空間を持ちます。親し

みのあるものの占有空間まで、住む人は自分の親密な領域を広げようとするのです。その結果テラスに椅子やテーブルを置くだけで、そこに住む人の意識はテラスを自分達の占有空間の延長、親密な領域と認識します。窓越の小さな庭に、大切な人から送られた樹木を植えれば、その小さな庭は特別な外部空間となって、内部で生活する人に安らぎを与え、外部と内部の二つの空間を分けることなく、そこに広がる空間全体を自分の空間にすることができのです。物と空間の性質は、外部空間に限られたことではありませんが、敷地全体を住まいとして活用するためには、外部空間だからこそ、そうした工夫が効果的なのです。

6. 光：昼と夜

○ 変化する光と風景

元旦の夜明け、多くの人が良い年にと願って日の出を見つめます。夜明けの光は、私たちに門出や出発をイメージさせます。一方、夕暮れの空、赤く染まった光には何かしみじみとした感慨があり、暮れていくという言葉が終わりを告げるような一種の寂しさを感じさせます。周辺の緑

の草木が黄色い色からしだいに紫へ、赤く染まっていく空を背景にして変化していく様子は、美しい一日が終わっていくことをゆっくりと告げているようです。北に対して地平線上に忠実に半円を描く太陽も、その光は一日の始まりと終わりでは、私たちにとつて、まったく異なった光として感じられます。自然光は又、季節によつてその傾きや強さが異なります。開口部を室内に効果的に配置すること…大きさ、位置、そして方位を考慮すること…によつて、こうした自然光の変化をインテリアとして取り込めば、室内の白い壁でさえ様々な色あいに変化します。又、光が身体の生理に直接影響することも考慮すると良いでしょう。自然の光は身体を活発にしますが、寝室に東向きの開口部を設置すると、朝の光が身体に照射され心地よく目覚めることができます。

○ 夜の光

日中の活発な行動を終えて、夜には家族が揃い、家族の空間が広がります。自然光を開口部の設置の仕方々々に取り入れるのと同様、人工照明による空間のしつらえは、就寝までの数時間、食事に会話、そしてくつろぎの風景を有意義なものにするのに重要な役割を果たします。さらに当然のことですが、同時に利便性を考えた計画をしなければなりません。部屋の用途や使い勝手によつて、家の内部での様々な作業を支障なく行えるように、照度と位置、器具のデザインを考

慮しなくてはならないのです。しかし注意すべきことは、部屋がいくつあっても、基本的に家はひとつの空間ですから、光の色あいを統一したほうが良いでしょう。蛍光灯があり、白熱灯がありでは、空間が分断されてしまう恐れがあります。空間の連続感の重要性は先にも延べましたが、夜の室内空間ではこの光の連続感がとても大事なのです。このことは照明器具のデザイン選択にも影響します。光はランプから器具を通して放たれるのですから、器具の形状や質感などにも配慮します。

光は物に照射しそのものを照らし出します。更に光は物にあたって反射します。室内の特徴を備えた部分に照明を当てたり、壁に反射させて部屋の一部分を明るくしたりすることによって、部屋に様々な表情が生まれます。建築的な方法によって、器具を隠して光だけを室内に放つこともできるでしょう。又、時間や目的によって、器具を使い分けることで変化をつけることも出来ます。食卓の料理が美しく見える適度な明るさがあり、また少し暗くなった部屋のコーナーに暖炉の火が赤々と美しく燃え、お気に入りの版画が柔かく浮かび上がる。一様な明るさとは異なり、光による演出によって、部屋に奥行きが生じるのです。先に述べた外部空間に照明演出を加え、室内と連続させることができたなら、光による奥行きの効果はますます増していきます。照明演出された空間では、音楽も美しく聞こえます。音はその場所の光の状態に影響を受けます。というのも、演奏者がどこかにいると感じさせることの出来る空間には、明暗と奥行きが必要だからです。

これまで、敷地を含む家の構成要素についてお話してきました。それらは複雑な建築の一部分に過ぎませんが、個人の空間や領域にもっとも影響を与え、間取りや広さや機能・設備といった、家をつくるにあたっての条件に加え、家の構成、さらには家の性格を決定づける重要なエレメントであります。逆にいえば、機能的な側面や、はやりのスタイルだけを念頭において作られる家では、見落とされ、置き去りにされてしまうような内容とも言えるのです。家は住む人に自然に働きかけ、住む人は、その自然のうちに、自分のそして家族の空間を、この地平線上的もつとも親密な「場所」とすることができなのです。

第三章 家族の家

1. 安らぎと活力の場所

多くの人は朝出かけ、勤めや学校を終え帰宅します。誰もが一日の出発と帰還の場所を持っていきます。家のもっとも重要な働きは、この出発と帰還の拠り所として、住む人の心身を休め明日へ向かう活力を与える場所として機能することです。

これまでのような空間構成の工夫によって家は、家族にとって庇護され、許容された自由な場所、もっとも親密な場所となって、人を取り巻く空間領域の中心に位置することができます。風景につながる窓、閉じた部屋、開いた部屋、奥行きのある空間、敷地境界線までの家族の外部空間、夜と昼の光の演出…、家の内部空間は生き生きとして、人はそこに開放感を得、何よりもそのすべての空間の広がりやを、自分のもっとも親密な空間の延長として感じるすることができます。このような自身の空間の延長をなんの支障も無く伸びやかにできることこそが、くつろぎを得る条件でもあるのです。庇護され安心を得ることのできる空間があれば、外の世界に対しての恐れや

不安にも、あらたに立ち向かっていくことができます。早々自分を取り戻し明日への活力も復活させられるでしょう。

生き生きとした家の内部空間はまた、家族の共通の風景となります。家族それぞれの考えや思想が異なっているとしても、毎日の暮らしのうちに共通の風景が自然な一体感を生み出します。日々慣れ親しむことによつて無意識のうちに自然に結ばれていくのです。どこへ旅立っても家族それぞれにとつてその場所は、広い大地のもつとも大切な場所となるのです。

家はこうして、単なる機械仕立ての機能の数々を超えた、もつとも重要な機能を獲得して、「住まう人に安らぎと活力を与える」という本来の役割を果たすことができるのです。

2. 家族の記憶を育む家

家をつくる人は、多くの場合、入念な検討によってひとつの土地を入手し、家づくりに着手します。家づくりには、土地選定からそこに住む人の様々な思いが込められているのです。敷地をすべて住まい手の領域としてデザインすることの必然性は、そこから生まれます。そして、家を構成する要素の組み立てーデザインを、人の空間や領域、場所といった考えから出発し、発展させることによって、家は単に住むための機械という概念を超えて、まるで身体にびつたりのおーダーメイドの洋服を着るような心地よさを手に入れることができます。そればかりか、そうした家は家族と共に成長していきます。

最近の材料工学および建築工法の進展によって、以前よりも建築はその寿命を延ばしています。私たち建築家も、様々な工夫を凝らしアイデアを振り絞り、その場所で、しかもその家族のためだけの家を設計するのですから、できる限り建物が長く生きて欲しいと願います。寿命だけでなく、何か別の理由で建物が壊され、なくなってしまうこともあります。極端な場合、土地そのものの形状すら残さないで変わってしまう場合もあります。しかしながら、住む人のために良く考えられた家は、そうした状況をも乗り越えようとします。

家が完成し、新しい空間で四季を経験して一年が経ち、さらに月日を経ていく、家が一年、一年と年を重ねると同時に、住む人も年月を重ねていきます。設計打ち合わせの時には、未だよちよち歩きだったクライアントの幼な子は、完成一年後に家を訪れると、もうお話ができたり階段を一人で歩いたりしています。家が家族に少しずつなじんでいくように、家族も成長しているのです。窓を通して見える景色の移り変わり、テラスでの楽しい出来事、階段をあがって見える室内の風景、光による夜の穏やかなひととき、様々な家族の出来事が空間に交わって、家はそこでしか得られない空間の経験を住む人に与えてくれます。そしてその貴重な経験によって、人はその場所をかけがえの無い「場所」にしていきます。階段を歩く子供も、窓から見える風景や家族との出来事をその家と共に経験します。そして将来その子が成長して、広い世界に飛び出たとしても、その家での経験は思い出に変わります。家族を結び付ける風景の数々は、後日「ふるさと」となって子供の記憶に深く刻まれるのです。遠い将来、たとえ家が消え去ってしまったとしても、その土地での、その敷地での豊かな経験は、そこで暮らした家族の一人一人の記憶として、又人生の大切なひとときとして残っていくのです。人間のための空間から出発した家は、こうして住む人に豊かさを与え、その役割を果たし、壊れた後も家族の記憶の中で生きて使命を果たしていくのです。

おわりに

家は、人がそこを拠点にして人生の大半を過ごす重要な場所です。

ここで紹介した言わば「空間の出来事」は、実は親密な空間としてデザインされた家は、住む人の身体の延長であるということを示しています。家は単なる機能を備えた器ではなく、生きた空間として認識され、かたちづくられてはじめて、住む人のための「家」となることが出来るのです。

多くの情報が氾濫する今日、家一軒を建てるには、様々な問題をクリアしていかねばなりません。しかしながら、家の機能：本来の：は百年前、それ以前と変わらず「安らぎと活力を得る場所」であり、「家族の記憶を育む家」なのです。設備、構造、工法の利便性や合理性を一方で享受しながらも、本来の機能を達成することが、家づくりを本当に満足のいくものに仕上げることになります。

取り上げた内容は、住宅建築のほんの一部分に過ぎませんが、家づくりのヒントになれば幸いです。

参考文献

- 「トポフォリアー 人間と環境」 イーファー・トゥアン著（せりか書房）
- 「空間の経験」 イーファー・トゥアン著（筑摩学芸文庫）
- 「人間と空間」 フリードリッヒ・ホルノウ著（せりか書房）
- 「場所の現象学」 エドワード・レルフ著（筑摩書房）
- 「風土」 和辻哲朗著（岩波書店）
- 「日本の空間構造」 吉村貞司著（鹿島出版会）
- 「建築の世界」 クリスチャン・ノベルク・シュルツ著（鹿島出版会）
- 「メディア論」 M・マクルーハン（みすず書房）
- 「伝統とかたち」 伊藤ていじ（淡交社）

浪瀬朝夫

▲浪瀬建築設計事務所

<http://namise-archi.com>

